

# ひと街しごと

平成14年(2002)12月 (年4回発行)

発行：(株)印刷紙工

札幌市中央区南15条西18丁目

Tel(011)561-3597

編集：ひと街しごと刊行会

札幌市中央区北1条西17丁目

北海道不動産会館4階

(有)編集工房海内 Tel(011)623-6652

No. 2



## たくさんいたね

## 休み時間の王者

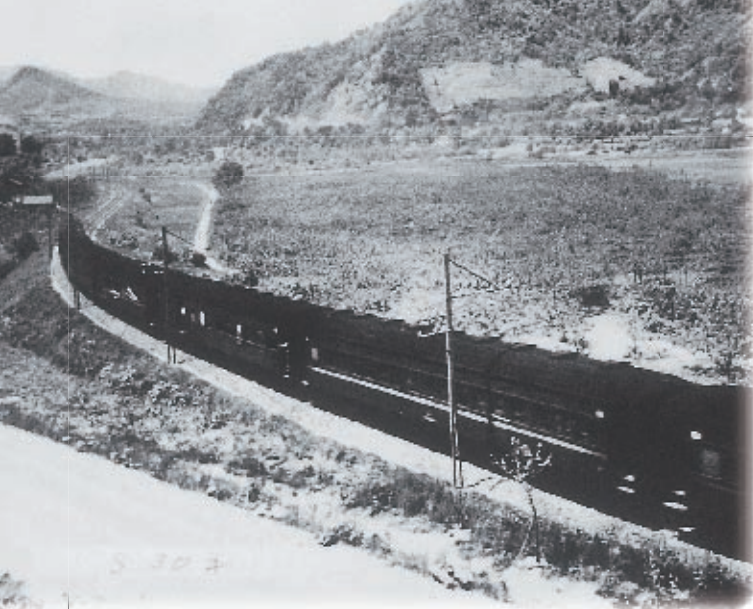
歴史はいつも未来へのみちしるべです。  
世の中の進むスピードと自分の生きていくペースが、  
少し合わなくなってきたなと感じ始めたら、  
思い出カードを一枚一枚めくっていきましょう。



どんなに算数がいやでもあと少し辛抱すれば休み時間。ベルが鳴ると同時に真っ先に外に飛び出して、さっきのゲームの続き——勉強よりも遊びの思い出の方が多い小学校時代。いまある私の原点といっても過言ではないでしょう。いや、それではあまりにも遊んでばかりいた？あの時代が育んでくれたものをいつまでも大切に。

思い出カード

学校編



昭和30年、石山付近を走る定鉄（札幌市写真ライブラリーから）

# 半世紀も走ったローカル線 札幌市民にも思い出いつぱい

## 定山溪鉄道

のんびり、ほのぼの——ローカル線の味わいはどなたもご存じ。でも、いつも採算性という名の逆風にさらされているのは、昔も今も変わらないようです。百八十万大都市にふくらんだ札幌にも、かつてそんなローカル鉄道がありました。その名は定鉄（じょうてつ）。

札幌っ子でもおそらく三千代半ばから下の人は、定山溪鉄道といっても知らないでしょう。白石と定山溪の間を豊平川に沿って、大正七年（一九一八）十月に走り始め、昭和四十四年（一九六九）十月、五十一年の歴史に幕を閉じました。そもそもは豊羽鉾山の鉾石の運搬、一帯の森林からの木材の切り出し、そして定山溪温泉への観光客の誘致を目的にレールが敷かれたものですが、



旧豊平駅。現在はじょうてつ本社

定鉄廃止当時の路線図



現存する唯一の駅舎、旧石切山駅  
現在は石山商工振興会館に



沿線住民の足として、あるいは札幌市民のささやかなレジャーの友としても、愛着を持って利用されてきました。  
定鉄の思い出。  
「平岸付近を走るときはリングコに手が届きそうだったね」  
「山菜採りでよく行ったのは滝の沢駅だったかなあ。キノコ採りにも行ったし」  
「小金湯駅がなつかしい。溪流釣りに行って、ひと風呂浴びて……」  
「定鉄といえどやっぱり十五島公園でしょう、炊事遠足の思い出。藤ノ沢駅で降りて細い道を伝ったこともあったし」  
「定鉄って、札幌駅から乗ったような気がするけれど……」（多くの人は豊平駅での乗降が記憶にあるかもしれないが、昭和三十八年からは国鉄札幌駅からも乗り降りできました）  
こうして人々に親しまれてきた定鉄の運命を決めたのは、やはりモーターゼーションの発達による利用客の減少。加えて道警からは、主要道路と交差している多くの踏切が事故の元と改善を要求されたこと。さらに札幌市からは、地下鉄建設のために平岸—真駒内間（現南北線高架部分）の買取要請があったことでした。

国鉄からの借り物の蒸気機関車でスタートし、やがて電化、ディーゼルと時代の流れには対応してきましたが、昭和三十年代から四十年代にかけては高度経済成長の真っただ中。そのスピードには勝てなかったということです。

※参考文献（路線図とも）

「南区のあゆみ」／さつぽろ文庫11  
「札幌の駅」／同59「定山溪温泉」



# 来た道、 行く道。

様々な先達がいるからこそ  
二十一世紀があるんだよ——  
スローコミュニケーションを求めて。

## 創

業昭和七年（一九三二）という老舗なのに、何とたくさんの方があふれていることでしょうか。二階建て、ガラス張りの店内には、国内外のあらゆる種類の自転車が所狭しと並んでいます。社長の小野盛秀さん（六）がそれまでの勤めを辞めて、創業者である父の仕事を見習い手伝い始めたのは昭和三十八年。兄たちが自動車の整備工場などに経営を広げる一方で、意を強くしていったのが「自転車の人気を高めるには、競技人口

小野盛秀さん——札幌市  
サイクル小野サッポロ

## 「競技人口を 増やしたい一念、 国際大会を支える」



自転車と関連のグッズで色とりどりの店内



通りに面した部分はガラス張り  
関心のある人は必ず足を止める

耐える」ときつぱり。「気力、体力を養うと同時に絶えざる勉強」です。冬期間は週二日の休みですが、三月中旬から五月のゴールデンウィークまでは休みなし。新車の組立て、納品に汗を流します。自転車の魅力とは、「不安定な乗り物なのに、人力で走る世界最速の乗り物。奥が深いんですよ」（小野さん）。



を増やすしかない」ということでした。それには走る場所、大会の機会をもっとつくらなければ——「そろそろ辞めるとき」という札幌自転車競技連盟理事長の就任が昭和五十五年。今年からは道連盟の理事長にも就任しました。そして大役は十六回を数えるツール・ド・北海道国際大会のアピールパネル（審判）。

町の自転車屋さんの信念が、北海道の自転車競技界を支える太い柱になりました。平成六年、店舗が北一条通りから現在の北二条に移ったのを機会に、兄弟で会社を分けてこちらの社長に。若い六人の従業員とともに「需要のなくなる」冬は



本欄への自薦、他薦を  
お待ちしております。



様々な仏壇、仏具が並べられた店内。質問にも丁寧に答えてくれる

## 札

幌の仏壇製造は、外山隆蔵が明治三十八年に製造したのがはじまりといわれている——さつぽろ文庫（27職人物語）のこんな一節に引かれ

外山隆幸さん——札幌市外山仏壇店

## 「あと二年で、 店舗も同じ場所で 創業百年」



人たちと注文品を作っています。とはいえ近年の主流は販売、それに「お洗濯」。仏壇のタイプは大きく分けて金仏壇、唐木仏壇、現代仏壇の三種類があり、全国各地で生産されています。最近海外で大量生産されたものも出回り、安売り合戦の様相も。隆幸さんは「安ければいいのなら、他の生活用品と同じじゃないでしょうか」と警鐘を鳴らします。

お洗濯というのは、古くなった仏壇を分解しての大修理。漆を塗り直したり金ばくを張り直したりして再び組立てます。この作業の喜びの一つは、祖父や父の作った仏壇と出会うこと。よいものを作り続けなければと励まされるひとときです。職人の減少や安い商品の流通で、宗旨による仏壇の作法の違いを知る人もまた減ってしまいました。その形式にも詳しく、さらに寺院の仏具の修理も手がけているという隆幸さん。生き字引というにはまだお若い年齢ですが、いつまでも文化を継承していつてほしいものです。



もともと職人の街として発展してきた界わいに創業100年のノレン

て、二条市場にほど近い店舗を訪ねると、柔和な笑顔で迎えてくれたのが三代目の外山隆幸さん（五）です。聞けば隆蔵さんは祖父。冒頭の記述より一年早い明治三十七年（一九〇四）に新潟から来道して、この場所で創業したそうです。隆幸さんが十歳のときに父が他界。その後は母が店を切り盛りするのを見てきたこともあって、学業を終えると迷わず後継者の道へ。二十二歳で本州へ仏壇製造の修業に出ました。そして自ら製造・販売に携わってすでに三十年とのこと。仏壇製造は彫刻、塗り、金ばく、金具といった工程にそれぞれ専門の職人がいて、こちらでは札幌でも数少なくつた

## 本・づ・く・り 相談室



### 自分史を 書店に並べたいが どうすれば……

**Q** 自分史の構想を練っていくうちに、我ながら面白い本になりそうな気がしてきました。より多くの人に読んでもらうために書店に並べたいと思いますが、どうすればよいのでしょうか。

**A** 個人的に知り合いでもあれば別ですが、まず書店に置いてもらうということは不可能に近いことです。

本の流れは、出版社→取次会社→書店というルートをとります。そのために出版社は取次会社に取り口座を持っており、

図書コード（ISBN…）も取得しています。

もつとさかのほれば、本が商品として売れなければなりませんから、出版社はその企画・編集・販売に当たって綿密なプランを練っているのです。そんなたくさんの本と自分史が、書店という同じ土俵に上がるのが見当違いということなのです。

どうしても本屋で売りたいというなら、自分史でなくもつと話を絞って、最近よく広告を目にする「あなたの原稿を本にします」という出版社にでも相談してみるとよいでしょう。

## ここで調べる

北海道立文書館（もんじょかん）

### 北海道に関する 資料二十四万点

自分の生い立ちを書くときに、あるいは青壮年期の貴重な体験の補足として、関連地域の歴史や公文書などに触れる必要がある場合があります。そんな資料を中心に二十四万点もの文書や記録を所蔵しているのが、道庁赤レンガ庁舎内にある道立文書館です。

例えば先祖の北海道への入植状況や、かつて暮らしたところのある樺太のことを調べる

自分の生い立ちを書くときに、あるいは青壮年期の貴重な体験の補足

というときに役立つはず。閲覧室は開架式ですので、目録カードで見たいものを探して係員に請求しますが、わかりにくいときには直接、カウンターで問い合わせを。

文書、資料類ばかりでなく一般図書、年鑑類、新聞などもそろっていますので、調べ物ももちろんOK。文書の写真撮影、マイクロフィルムのコピーもできます。静かな環境が魅力。

●所在地／中央区北四条西六丁目赤レンガ庁舎内  
●電話／二三一四一一

## 出版ニュース



### 句集 米寿以後

高瀬 白洋



（四六判、上製本）  
240ページ

著者は明治四十一年生まれ、九十四歳。病床にあつて

癌と闘っています。

タイトルからもわかるように、すでに句集「傘寿」（平成二年）、「米寿」（同八年）を上梓しており、葦牙同人の重鎮としての集大成といった趣があります。題材は年齢を重ねるにしたがって自由奔放に。かわいい孫への愛情や老妻へのいたわりを詠む句も目立ちます。

葱刻み吾より長く妻生きよ  
みたらしに木の葉一枚神無月

### 星置ノ瀧

中江良夫著  
一原有徳編

中江良夫は室蘭出身で昭和



（A5判）  
92ページ

六十一年、七十五歳で他界した脚本家。戦前から昭和四十年代にかけて、舞台や放送劇の脚本を一千本近く書いています。編者の一原氏はよく知られた版画家。青春時代に二人は小樽で親交を結んでおり、無二の親友でした。

放送脚本二編と短文が納められていますが、放送劇はまさに想像力を喚起してくれます。表題作「星置ノ瀧」も友情について述べた佳編。

### 「本づくりおしゃべり会」 今年も三回開催で終了

より多くの皆さんに本づくりの楽しさを味わっていただくこうとスタートした「本づくりおしゃべり会」。第二回が九月二十八日に、第三回が十月十九日に、印刷紙工で開かれました。

どちらも近隣地域からご参加いただいた少人数の集まりでしたが、二時間近くのアドバイス・質疑応答を熱心に聞いていただきました。

今年の夏に始めたささやかな試みですが、三回の開催で本年は終了。少しでも大きな広がり期待して今後も、新しい企画を盛り込んでいく所存です。ご案内の折は皆さんお誘い合わせの上、ご参加下さい。

●本づくりの無料相談を承り中 印刷紙工と編集工房・海では常時、本づくりの無料相談を承っております。お気軽にお越し下さい。

●「出前」します 五人以上のお集まりで会場をご用意いただければ、日時等をご相談の上、印刷紙工担当者と編集者がお伺いして、本づくりのアドバイスをいたします。

●記念誌づくりもお手伝い 企業や団体の節目の設立周年（二十周年、三十周年…）にちなんだ記念誌づくりもお手伝いいたします。企画から承ります。

●小紙をお送りします 小紙をご希望の方には、定期的に無料でお送りしております。印刷紙工までお申し込みを。